

(公開シンポジウム「災害に強い医科大学を歩む」  
) CBRNE テロの基礎知識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 芳裕 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10470/00033318">http://hdl.handle.net/10470/00033318</a>

下の事項を中心に説明する。

- 近年の大規模災害等を踏まえた体制整備の経緯とその体制
  - ・阪神・淡路大震災以降の体制
  - ・東日本大震災以降の現行の体制
- 医科大学として期待される役割と東京都・圏域内の関係機関等との連携
  - ・東京都災害拠点病院（東京女子医科大学病院，附属足立医療センター）  
災害時に主に重症者の収容・治療を行う東京都が指定する病院
- ※附属八千代医療センターは，千葉県が災害拠点病院として指定
  - ・緊急医療救護所支援  
区市町村が，災害拠点病院等の近接地等に設置する医療救護所
  - ・二次保健医療圏医療対策拠点(附属足立医療センター)  
圏域内の区市町村から情報収集を行い，医療救護活動の統括・調整を行う拠点
  - ・関係機関・団体等との連携  
医療救護活動拠点（区市町村設置），地区医師会・地区歯科医師会・地区薬剤師会，消防署・警察署 等
- 医科大学を含む医療機関等が発災直後から医療機能を発揮できる取組
  - ・施設補助の実施（耐震工事，自家発電設備・受水槽等設置 等）
  - ・訓練・研修・会議等の開催
  - ・東京 DMAT 指定病院（東京女子医科大学病院，附属足立医療センター）
- 東京都の今後の取組
  - ・災害時医療救護活動ガイドライン見直し 等

## 6. 災害医療に対する東京都医師会の取り組みと今後

（東京都医師会 救急・災害担当理事）

新井 悟

東京都医師会は地区医師会，大学医師会と共に東京都で発生した災害のみならず全国で発生した災害に対しても積極的に出動してきた。都内での災害に対しては被災地 JMAT として，発災直後から復興期に至るまで長期間にわたっての活動を行い，他県での災害に対しては発災 1 週間後を目途に JMAT チームを連続的に派遣している。平時においては東京都の災害医療協議会に参加し災害医療計画の策定に関わり，また研修会・訓練に関しては東京都医師会 JMAT 研修会（医師会員，その他医療関係者），区市町村災害医療コーディネート研修会，東京都災害時図上訓練（2 次医療圏ごと），東京都合同総合防災訓練を開催・参加している。対象となる災害は東京都における地震災害

のみならず，水害浸水災害対応も近年の重要な課題と捉えている。さらには感染症流行時の避難所運営についての対応も研修訓練をしている。大規模イベント開催時のテロ災害対応，軽度認知障害（MCI）対応についても積極的に医療チームを派遣し（東京マラソン大会，天皇陛下即位礼，東京 2020 大会），事前準備としてテロ災害対応研修を行い，また「大規模イベント医療救護ガイドブック」の作成も行った。今後の取り組みとしては，

- ・各医療機関での災害時事業継続計画（BCP）作成の支援
  - ・災害時における病院救急車の活用の支援
  - ・大学医師会との災害時の医療救護班派遣の協定締結を進めること
- を目指している。

## 7. CBRNE テロの基礎知識

（東京都災害医療コーディネーター，杏林大学 医学部救急医学 主任教授/高度救命救急センター長）  
山口芳裕

日本の医療者が CBRNE テロに対応する際の最大の懸念点はなにか。例えば，渋谷でスパ（温泉施設）が爆発した際の出動経験をもって，爆弾テロにも対応できると考えることは妥当か。答えは否である。事故と，テロや攻撃とは全く異質である。後者には「明確なる悪意」が込められているからだ。

### ●「悪意」を認識する

「明確なる悪意」とはどのようなことか。世界各地で多発する爆弾テロでは，総じて 1 発目よりも 2 発目の爆発の方が多量の爆薬が使われている。1 発目の爆発で多くの救助者を集めたところで 2 発目を爆発させるのである。さらに，ボールベアリングや釘などの金属片を含む IED（improvised explosive device）も汎用される。爆発と同時に無数の金属片が飛散して周辺の人の身体にめり込む。こうした身体損傷の処置は，戦傷医療の常識に則って施行されないと救命できない。

### ●「常識」で戦わない

ニューヨークの同時多発テロに前後して使われた炭疽菌の死亡率は約半分である。これは細菌学の教科書の記載に合致しない異常な高率である。白い粉は大きさが均一に揃えられ，高品質のタルク（滑粉）を使用して浮遊時間を長くして，感染力が高められていた。遺伝子操作による抗菌薬耐性も少なくない。教科書の常識では戦えないのである。

### ●結語

こうした「悪意」に対応する特殊な知識や技術をもつ日本の医療者はわずかである。有事の際の医療の対応力を高め，安全保障の中にしっかりと位置づけることが，喫緊の課題といえる。